

フェルメールを訪ねて

美術家 西田 聡 子

◆経歴◆

1987年:中国美術学院*
国画山水班在籍(文部科学省進修生)
1988年:中華人民共和国浙江省中国美術館作品展
2001年:JIS日仏ドローイング・版画展銅賞
2015年:Art Gallery in New York (Ward-Nasse Gallery)

◆教職歴◆

1979年 福岡県福岡市立玄界小学校、福岡市立西福岡中学校美術教諭等を経て、私立つくば秀英高等学校美術科教諭、現在同校美術科非常勤講師

1. 「真珠の耳飾りの少女」

フェルメールの代表作の一つである「真珠の耳飾りの少女」は、日本でもこれまで何度か公開されたこともあり、日本人ファンも多い馴染み深い作品の一つだ。しかし残念なことに、日本の美術館では鑑賞者があまりにも多いため、時間をかけて心ゆくまで鑑賞することができない。

本稿では、私の教え子(当時、東京藝術大学大学院博士課程 文化財保存学専攻)が、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」の研究と再現模写を博士論文のテーマとした際に、では一度、2人でゆっくりとフェルメールに会いに行ってみようと、1996年3月にオランダを旅した思い出について語りたい。

オランダアムステルダムの国立美術館とデン・ハーグのマウリッツハイス美術館での作品鑑賞をメインに、フェルメールの故郷でもあり生涯を過ごしたデルフトに滞在し、フェルメールにどっぷりと浸るのがこの旅の目的だ。その後、高速鉄道タリスでパリに移動し、ルーブル美術館の「レースを編む女」にも会ってきた。



■マウリッツハイス美術館ロビー (筆者資料)

昨今、旅の手配は航空券やホテル、列車の乗車券、レストランの予約まですべてパソコンでできる便利な時代となった。

マウリッツハイス美術館の2階ROOM15に展示された「真珠の耳飾りの少女」は、一見あどけない少女が振り返ったポーズに見える。しかし、目の前でじっくりと鑑賞すると、レオナルド・ダ・ビンチの「モナリザ」にも共通する不可解な印象を受けた。

驚き、不安、そして憂いを含んで大きく見開いた瞳、何か言葉を発しているようにも見える半開きの唇。少女のように見えるその表情には似つかわしくない額から眉にかけての大人びた知的さは、言葉にしてはならないすべての事を知っているかのようにさえ見える。



■「真珠の耳飾りの少女」
1665~66年、油彩、キャンバス、サイズ44.5×39cm
(筆者資料)

教え子の話によると、「真珠の首飾りの少女」の再現模写中は、心情的にとっても複雑だったそう。彼女は模写をしていると、その作者の心情にまで入り込んでいくそうで、技法以上にフェルメールに入り込んでいく自分をコントロールすることに苦労したという。

その話を隣で聞きながら、改めて「真珠の耳飾りの少女」を見ると、美術家である私も当然絵を描くので、制作者として「なるほど」と納得した。

模写とは、単に作品を写し描くだけでなく、その作品を描いた作者の心情にまで深く入り込んで

再現することなのだ。ともすると、入り込んだあまりに現実世界に戻るのに時間がかかる人さえいると聞く。そういう意味でも、この「真珠の首飾りの少女」という作品はかなり重い作品であると、作品を前にして改めて感じた。

マウリッツハイス美術館には、この他、フェルメールの「デルフトの眺望」「ディアナとニンフたち」の作品が展示されている。

2. フェルメールの故郷、デルフトの街

フェルメールが暮らしたデルフトの街はさほど大きくなく、散策がてらに歩くにはちょうど良い落ち着いた美しい街である。中世の建物や風景が多く残る街並みは、当時を彷彿とさせる。

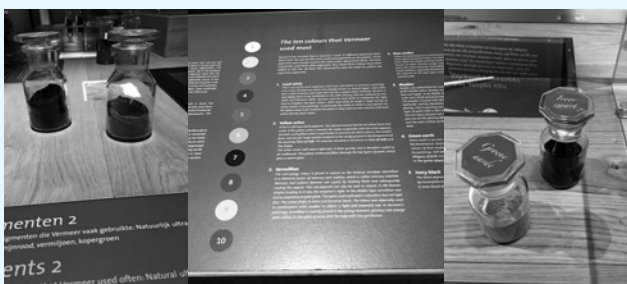
街の中央には、14世期に建造されたゴシック建築の新教会があり、マルクト広場には毎週木曜日に市が開かれ、150軒もの露店が並ぶ。チーズや野菜、ストローと呼ばれるクッキー、名物であるherring(鯡を塩漬し発酵させたもの)を置く魚屋など、どこを見ても楽しい。

フェルメールの生涯については、ご存知の方も多いと思うのでここでは述べないが、その生涯のほとんどをデルフトで過ごし、街の古教会に埋葬された。

マルクト広場のすぐそばにあるフェルメール・センター(<http://www.vermeerdelft.nl/en/>)では、フェルメールの人生に焦点を当てた展示が行われている。

地下1階の展示フロアでは、フェルメールが43年間の生涯で描いた37作品の絵画すべてが原寸大のプリントで時系列に配され、一堂に見ることができる。

さらに、6言語に対応した無料の音声ガイドを利用でき、展示内容が理解しやすくなっている。



■フェルメールが使用したラピスラズリの絵の具をはじめとする顔料のサンプルとその解説(筆者資料)

また、2階にはフェルメールの作品の中で使われた水差しなどの小物や顔料のほか、「真珠の耳飾りの少女」の青いターバンに使われたラピスラズリの絵具なども展示されている。

特に、学芸員が作品の修復の過程を詳しく説明するVTRは、現地ならではの見応えがある資料である。

さらに、フェルメールセンターには「フェルメールライト」を体験できるコーナーがある。

光を巧みに取り入れた構図は、フェルメールの作品によく見られる。窓から入る柔らかい外光を「フェルメールライト」と呼び、その光によって、描かれた人物の頭部を浮き上がらせ、観察者の視点を人物の表情へ導くように構成されているのである。

このコーナーでの体験は、フェルメールの色彩と当時の雰囲気を理解することができる貴重なものとなった。

作品が制作された場所を訪れることは、作品を理解する上で最も効果的である。時の隔たりはあるが、その場所の自然がもたらす空気や光、日本ではあまり見られない低く垂れ込めた雲とその影、現地の人々の今の暮らしも、フェルメールが暮らした時代と重なり、作品への理解を深めてくれる。

デルフトの語源は「Delven=掘る」であると言われている。デルフトの街は、防衛とライフラインの役割を果たすため、語源どおり街中に掘り進められた運河が、緑の木々とともに美しい風景を織りなす、心休まる場所であった。

今は世界中で新型コロナウイルス感染症が蔓延しているため、渡航が制限され気楽に海外の美術館を訪れることはできないが、感染症の収束後には、是非足を運んでもらいたい。あなたも、きっとフェルメールの世界に浸ることができるでしょう。



■フェルメールの光を再現したセットの中の筆者(筆者資料)